

26年度第2回ヘリテージマネージャー育成講習会が28日、福島市の県建設センターで開かれ、鈴木木人鈴木設計代表取締役が「歴史的建造物の本質的な価値を守り活用する」旧堀切邸再生物語、三浦藤夫三浦工匠店代表取締役が「歴史的建造物の修復保全」について説

明した。鈴木氏は、平成8・9年に文化庁の補助事業として、県建築士会等の協力を得ながら県教育委員会が全体的に実施した「近代和風建築総合調査」で花水館奥御殿など

の調査に当たった。この後、福島市写真美術館の内部復原を行い、県文化財保護審議会委員を長期にわたって務めた故草野和夫氏の指示を仰いだことが「文化財を手掛ける直接のスタート」という。震災で多くの文化財に被害が生じたが、なかむらや旅館や旧亀岡邸の震災復旧・補強、板倉社社の再建に当たったほか、さまざまな被害調査を行っ

た。父・昌夫氏が飯坂温泉 鯖湖湯再現に携わっており、自身も旧堀切邸、なごらや旅館、福島片岡工。県建築文化賞受賞や

鶴太郎美術庭園、現在工事中の飯坂消防署など、親子2代で飯坂地区の再生にかかわっている。このうち鯖湖湯は木造最古の共同浴場で、昭和60年に既存調査を実施。隣接する透蛇湯を統合し、ポケットパークを併設する計画で、有識者や

国のRACコンテスト入賞などを果たした。その向かいにある堀切邸は、16世紀に端を発する名家で、近代ではイタリア大使や東京市長も輩出した。屋敷は1200坪。火災で一部焼失した明治13年以前はこの町・齋理屋敷を参考に、建物整備にとどまらず

が担当し再生整備事業を実施。既存建造物を活用しながら地域・観光交流や文化の伝承、周辺景観の調和、コスト削減をテーマに設計者選定プロジェクトが行われた。そこで鈴木氏は丸森町・齋理屋敷を参考に、建物整備にとどまらず

の技と進取の気風の融合が生み出したものと振り返る。震災後、消失した名建築についても触れ、危急危険度判定や被災調査で、最初にかかわった専門家が発した言葉が非常に大きく、維持を検討するよりも公費解体の補助制度にすがってしまうケースがあるようだとし、補助金制度の充実や歴史的建築物のデータ整理を訴え、歴史的建築物を後世に引き継ぐため①文化的財産の共通認識②専門家の適正なアドバイス③所有者に寄り添った対応④行政担当者の対応と情熱⑤人的ネットワーク⑥資金調達方法の構築を提言した。

専門家の助言が存続左右

伝統維持へ担い手育成

ヘルメットを被った三浦氏は、平成3年に福島市の堀切家から屋敷の提示を受けているが、17年に暫定開園するまで空き

という。平成3年に福島市の堀切家から屋敷の提示を受けているが、17年に暫定開園するまで空き

家の状態が続いており、この時期にハクビシンやコウモリなどが住み付き、雨漏りなどで建築物がかなり傷み庭園はシャングル状態となった。

堀切邸は、市の観光課に支えられた提案で、匠

三浦氏は、堀切邸やなかむらや旅館のほか、国見町・奥山邸の住宅・洋館修理、矢吹家住宅の修



講演する鈴木氏(上)と三浦氏

保健所などの意見相違を乗り越え平成5年に竣工。県建築文化賞受賞や

大工、左官、瓦、建築具、天然スレート職人、造園、展示、舞台演出、ランドスケープ、照明デザイン、模型など専門技術者集団「チーム堀切」

三浦氏は、堀切邸やなかむらや旅館のほか、国見町・奥山邸の住宅・洋館修理、矢吹家住宅の修

ごたえを感じ、臆することなく修理ができるようになったという。